

■ 住職戯言



情けは人のためならず

情けは人のためならず

皆さん、こんにちは。竺園寺の渡邊恭山と申します。

先日、テレビを見ていましたら、「情けは人のためならず」ということわざが取り上げられていました。

びっくりしました。

最近の若い人の中には、この諺を「甘やかしてはいけない。」という意味に取っている方が多いのです。

ゆとり世代の反省みみたいなことを言っているのです。

さらに、有識者の方は、人のために何かをすれば、必ず見返りがある。

情けは人のためではなくて、自分のためにするのだという意見を言っているのです。

世の中の多くの方の一般的な意見でしょうか。

本当にそれだけでしょうか。

情けは人のためならず。情けとは、思いやりです。

思いやりで、人のためになることをして行くことです。

このことを仏教では、布施と言います。

布施とは与えることです。

さらに、喜捨、喜んで捨てるということでもあります。

そして、品物やお金を与えることばかりではなく、親切な行いも布施なのです。

中国の唐の時代の大珠慧海禅師の「頓悟要門」では、

私たちが、仏教の修行をする時、布施の修行が一番良いと言っております。

それは、善いとか、悪いとか、好きだとか、嫌いだとか、損とか得とか、比べたり、企んだりする計らいの心が囚われているもの、そして、心に偏りのできてしまうことを喜んで捨てていくという布施の修行なのです。

詩をお読みします。鈴木千奈津さんという方の詩です。

千奈津さんは小学生の頃に、病気をされ、手足と言葉が不自由になりました。その当時の主治医の先生のお話では、閉じ込められたような状態だったと言います。伝えたい事があっても伝えることができないのです。

ある日、おかあさんとお風呂に入っています時、おかあさんが「千奈津、お前が、字が書けたら皆に千奈津のことが判ってもらえるのにね。」と言いますと、千奈津さんは、一生懸命、お風呂の曇った鏡に、ひらがなを書きました。おかあさんは大喜びしました。それから、徹しいリハビリをして字が書けるようになり、詩を書きました。その中の「与える喜び」という詩です。

(詩集『はるのかんじ』鈴木千奈津詩集より)

「与える喜び」

与えることはどんなこと？

プレゼントすること

欲しいものを渡すこと

持ってる心を分けること

といろいろあるよ

すべて人を喜ばせること

相手を思っていること

そして自分は犠牲を払っている

ということは損すること？

いえいえそうではありません

喜ぶ顔が見れたら 喜びが戻ってくる

喜ぶ顔が見れたら 幸せになれる

与えることは 幸せへの道

与えることは 自分が豊かになる道

喜びだね 与えることは

伝えたくても伝えられない経験を持つ千奈津さんだから、与えることに喜びを見出したのです。

自分の側からだけしか見なければ、損する事かもしれない、犠牲を払うことかもしれない。けれども、相手が喜ぶことによって、喜びが戻ってくる、自分も幸せになれると言うのです。これは、布施の行いそのものです。

布施というのは、布施をする人も、布施を受ける人も、布施自体も余計な計らいの心が入

っていない純粋な心を込めた行いなのです。

秋のお彼岸のお話です。あるお宅にお参りました。

家の方がお茶を出してからおっしゃるのです。

「和尚さん、私ちょっと五分くらい外に出なければならぬ用事ができてしましまして、おばあちゃんがいるので、お経をしておいてくださいますか。」

そして、ちょっと声を低めて「おばあちゃんが、最近物忘れがひどいので、もしかしたら、何か変なことを

言うかもしれません、気にしないでください。」とおっしゃるのです。

おばあちゃんが仏間に入って来られました。

家の方は、お茶を片付けて、「それでは、お願いします。」と出かけられました。

私は、お経を始めました。

お経の途中から、おばあちゃんが、台所の方へ行ってしまったのです。

そして、いろいろと食器を出し入れしている、ガチャガチャという音が聞こえはじめました。

私は、お経が終わってから、「おばあちゃん、何をしているの」と声を掛けました。

おばあちゃんは「和尚さん、ごめんなさい。お茶も出さないで」とおっしゃるのです。

私は、「さっき、家の人に出してもらったから、大丈夫ですよ。」と答えました。

しばらくすると、おばあちゃんはお茶を持って来られました。

「急須にお茶の葉を入れて、お湯を注ぐことまでは、覚えているのだけれど、その後どうするか、どうしても思い出せなくて、間違っていたらごめんなさい。」と不安そうな顔で言うのです。

見ると、柿の木の図柄のとても美しい器に、少し濃い目のお茶が入っていました。

まるで、深い泉のほとりに一本の柿の木がずっと立って、紅い実を水面に映している風景を思わせました。

美しいなと思いました。でも、その器は、お茶碗ではなく、小鉢でした。

茶道の世界でも、あの千利休さんは、朝鮮のご飯茶碗を、抹茶茶碗として使いました。

この器は、お客様にお出ししたら、きっと喜ばれるだろうと使われたのでしょうか。

おばあちゃんも千利休さんと同じです。

この器ならばお茶が映えて、和尚さんは喜んでくれるだろうと出されたのでしょうか。

でも、長い間、ガチャガチャとしていましたから、きっと、いろいろな器に入れて、試していたのでしょうか。

私は、涙が出るほど嬉しくなりました。

一生懸命おもてなしをしようとするおばあちゃんの心に嬉しくなったのです。

私は、「美味しいよ」とにっこり笑いました。

おばあちゃんも、嬉しそうに微笑んでくださいました。

和尚さんに喜んでもらいたいというおばあちゃんの心とその心のこもったお茶、そして、おばあちゃん的一生懸命さに、ただただうれしかった、私の気持ち、純粋に相手を思いやり、

純粹に相手の思いを受け取る。

すべてが純粹なのです。これが布施なのです。

情けは人のためならず。

もちろん、自分のためではありません。

ただただ、そうせずにはおられないのが布施の行いなのです。

そうせずにはおられない思いやりの行いなのです。

数学者の岡潔さんは、仏教の善行を

「自分がいいことをするとか、私が、他人にしてあげるとか、そんな気持ちがあれば本当の善行ではない。

当然のことをしたまでだという行い、自分を意識しない善行、つまり、善が善を行うのが善行である」

と言います。

情けは人のためならず、情けは誰のため、とか何のためとか、
ためがあっては、本当の情けにならないのです。

ためを消してしまわなければならないのです。

何かのためという、計らいの心自体、捨ててしまうのです。

ただただ、そうせずにはおられない、情けだけになるのです。

情けは人のためならず。

情けは情けを行わずにはおられないということです。

これが、布施の心を行うということなのです。

皆さんも、自分のためとか、見返りのためとか、何かのために布施をしていませんか。

もちろん、自分のためではありません。

ただただ、そうせずにはおられないのが布施の行いなのです。

そうせずにはおられない思いやりの心を大切にしてください。